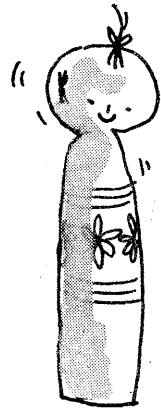


幼児の家庭生活と音楽リズム

清水 美代子



幼児が限られた家庭生活から出て、同年の仲間と生活する場をもつことは大きな変化で、かつ大切な意義をもつものであるが、大人の考え方のいかによってはその意義を取り違えたり、せっかくの有意義な生活の場をこわしたり、伸びようとする芽を摘み取ったりすることがかなり多いと思われるが、「音楽リズム」にも同様なことは言えると思う。行動を伴うことだけに、その反応を相当はつきりと子どもたちが出しているのに無視されがちな場面は大変多い。それが教育の場でいろいろな問いかけになって現われているように思われる。

何といっても、音楽性^{注I}やリズムに反応して動くことが一番育つのは、一生の間でこの時期であるし、こうして育った感覚はいろいろな面に作用して、人間の^{注II}な成長にもかわりがあるので、望ましい活動を育てなければならぬと思う。そのためには幼児に對する正しい理解ができるように努力をすること、そのかわ

り方についての反省を忘れてはならない。保育の場では、もっと遊びの場を与えて自主的な活動のできる力をつける必要があると、声も高いが、それこそ幼児期の「音楽リズム」のもつ根本的な目標である。自分の力で行なえるように育てることこそ一番のねらいで、望ましい発達とはそのための基礎的条件を積み重ねつつ、その内容に反応していくことで、そこに喜びと自信と愛情が育つものであると思う。

私は子どもが幼かったころ、音楽の個人教授を受けさせてみて、幼児の音楽教育は何かこれでは違うのではないかと考えたことがあった。その時は何だといえなかつた原因の一つはそのことであると同年かたつてから気がついた。しかもこのことは大人の暖かい愛情と、系統的な実践の場で励ましつつ繰り返し行なうことが条件であることにも気づいた。しかし大人が素直に子どもの行動を受け入れるならば、子どもたち一人一人について何を育て

べきかは大方気づくが、辛抱強く育てることはなかなか大変なことであることもわかった。幼児のためによい指導者が多くなることを願ってやまない。私も、自分の経験の中で正しい見つけ方を誤らないための模索を続けて行きたいと思っている。音楽教育研究者の眼もだんだんと幼児教育に向けられて来ているので実りの多くなることを信じている。

I 家庭での遊びの調査

一九六九年、OMEPPの国内会議に出席した時、そこでのテーマは「子どもと遊び」についてで、いろいろの方のご意見発表を聞いた。翌年の地域大会も東京であったので、他国の方からのご意見も多かった。そして今一度「音楽リズム」と遊びの関係について考えて見なければならぬと思った。何十年か前までは遊びの中にいっぱいあった歌遊びは何が取って変わったのだろうか、現代の子どもの遊びとは一体何だろうか、そんな問いかけもこの発表の中にはあった。そういえば私がこの仕事を始めたころ子どもの遊びを学生に調べてもらったことも思い出して、附近の保育園や幼稚園へ今一度カメラを持って学生と出かけた。その結果、子どもばかりでなく大人にとっても大切な遊びの基盤はこの時代に育つものであるという思いが学生の中にだんだん濃くなってきた。そして家庭での子どもの遊びが幼稚園や保育園の遊びとどん

なつながりをもっているか、また母親たちが子どもの遊びをどう見つけているかを知るために見学したことを参考にして、家庭遊びを調べることになった。

この遊びの中から「音楽リズム」に関連した遊びもあるわけで、子どもにとって遊びに近い音楽リズムとは何であるか知る手がかりであるとも考えた。表Iはその結果である。◎印は「音楽リズム」に関係の深いと思われるもので、一番多数だったテレビは実際にはこの年代になると、別な関心の方が強くなってあまり大きな影響を受けないように思われる点もある。むしろ二歳前後注IIIから三歳前後の方が、直接リズム運動や、歌唱の影響を多く受けるように思われる。それは年長児等が主題歌やコマーションソングを歌ってもほとんど正しく覚えていないことや、二、三歳の子どもが幼児のうたを熱心に聞き、比較的正しい言葉で覚えること等を思い合せるとうなずける。次の表IIの家庭で歌う歌からもそんなことがうかがえると思う。その他に◎印をつけたのはこの中に木琴、オルガン、電子オルガン等の楽器があげられているためである。

この表によるとこの年代の遊びはずいぶん多い。このような調査をする時いつもながら母親が真面目な解答をよせてくださることで感謝するのである。調査の対象地がいずれも住宅として開発されている地方なのでまだまだ子どもたちの遊ぶ場所がいっぱい

〔表1〕

調査地 名古屋市中村区、犬山市、岩倉市、小牧市、
江南市 11幼稚園、3保育園 (回収率：62%)

屋内遊び (S46.8)

人数 943名 <男子 3歳 < 29名 4歳 < 135名 5歳 < 132名 6歳 < 81名
女子 < 43名 < 135名 < 294名 < 74名

3 歳	人数	%	4 歳	人数	%
テ レ ビ	58	80	テ レ ビ	246	85
絵 本	40	56	お り 紙	173	59
おもちゃ屋ごっこ	39	54	絵 本	162	56
つ み 木	37	51	ぬ り 絵	149	51
字 あ そ び	31	43	おもちゃ屋ごっこ	139	48
フ ロ ッ ク	27	38	フ ロ ッ ク	122	42
ま ま ご と	25	37	つ み 木	109	38
お り 紙	25	37	ま ま ご と	103	32
人形あそび	21	29	ぬ ん 土	87	30
ぬ り 絵	21	29	人形ごっこ	86	28
粘 土	18	25	字 あ そ び	75	26
フ ラ ン コ	17	24	医 者 ご っ こ	57	20
ホ ー リ ン グ	16	22	の り も の ご っ こ	46	16
医 者 ご っ こ	14	19	ホ ー リ ン グ	46	16
の り も の ご っ こ	11	15	お 客 ご っ こ	44	15
す べ り 台	10	14	ト ラ ン プ	44	15
お 客 ご っ こ	9	13	カ ル タ	41	14
◎ピ ア ノ	7	10	お 店 ご っ こ	39	13

5 歳	人数	%	6 歳	人数	%
お り 紙	235	55	テ レ ビ	118	75
テ レ ビ	221	48	お り 紙	90	58
絵 本	205	48	おもちゃ屋ごっこ	75	48
おもちゃ屋ごっこ	155	36	絵 本	73	47
フ ロ ッ ク	153	36	ぬ り 絵	71	45
粘 土	152	36	粘 土	64	41
ま ま ご と	151	35	ト ラ ン プ	59	39
ぬ り 絵	137	33	ま ま ご と	47	30
人形あそび	131	30	人形あそび	45	30
お 客 ご っ こ	127	30	カ ル タ	45	30
つ み 木	125	30	フ ロ ッ ク	44	29
ト ラ ン プ	125	29	字 あ そ び	44	29
カ ル タ	118	27	つ み 木	39	25
字 あ そ び	115	26	医 者 ご っ こ	28	16
医 者 ご っ こ	109	26	ホ ー リ ン グ	24	15
ホ ー リ ン グ	88	21	す べ り 台	26	15
◎ピ ア ノ	86	21	◎ピ ア ノ	20	13
く み 絵	76	18	く み 絵	17	11

19	お店ごっこ	6	8	アラソコ	37	13
20	トラソコ	5	7	すべり台	36	12
21	くみ絵	4	6	くみ絵	28	10
22	輪なげ	4	6	◎ピソコ	24	7
23	カールタ	3	4	◎おて玉	11	4
24	ソジャクベルト	3	4	おはじき	8	3
25	お手玉	2	2	パチソコ	8	3
26	パチソコ	2	2	輪なげ	8	3
27	おはじき			ピソコ	4	2
28	ピソコ			ソジャクベルト	3	1
29	その他			◎その他	5	2

お店ごっこ	74	17	お客ごっこ	13	9
アラソコ	74	17	のりものごっこ	13	9
すべり台	61	14	アラソコ	12	8
のりものごっこ	54	13	お店ごっこ	9	6
輪なげ	38	9	◎お手玉	8	5
パチソコ	28	7	ソジャクベルト	7	4
ピソコ	26	6	輪なげ	6	3
おはじき	19	5	パチソコ	5	3
◎お手玉	18	4	ピソコ	4	3
ソジャクベルト	1	—	おはじき	3	2
◎その他	7	(2)	◎その他	5	3

屋外遊び

	3	歳	人数	%	4	歳	人数	%
1	砂あそび		56	78	砂あそび		211	73
2	アラソコ		46	64	水あそび		191	66
3	三輪車		46	64	アラソコ		172	59
4	水あそび		36	50	三輪車		157	58
5	すべり台		29	40	すべり台		139	48
6	ままごと		27	38	ままごと		110	38
7	ボールあそび		21	29	自転車		105	36
8	シャボン玉		18	25	シャボン玉		101	35
9	かくれんぼ		18	25	ボールあそび		84	29

5	歳	人数	%	6	歳	人数	%
砂あそび		280	66	自転車		96	62
アラソコ		187	44	砂あそび		95	61
自転車		181	42	アラソコ		83	54
ボールあそび		178	42	水あそび		78	50
ままごと		165	39	ボールあそび		64	41
すべり台		153	36	シャボン玉		55	35
シャボン玉		143	34	かくれんぼ		55	35
おにごっこ		128	30	すべり台		50	32
なわとび		120	28	ままごと		44	28

10	㊦かごめ	15	21	かくれんぼ	76	26
11	自転車	14	19	おにごっこ	69	27
12	のりものごっこ	12	17	ジャンブルジム	46	16
13	おにごっこ	11	15	なわとび	42	14
14	ジャンブルジム	8	11	㊦かごめ	41	14
15	ちゃんばら	4	6	㊦花いちもんめ	26	9
16	なわとび	4	6	のりものごっこ	26	9
17	㊦通りゃんせ	3	4	ちゃんばら	20	7
18	㊦花いちもんめ	3	4	ゴムとび	14	5
19	タイヤあそび	2	3	㊦通りゃんせ	13	5
20	かんけり	1	1	かげふみ	10	3
21	石けり	1	1	始めの一步	10	3
22	かげふみ	1	1	タイヤあそび	6	2
23	ゴムとび	1	1	かんけり	5	2
24	始めの一步			石けり	4	1
25	ローラースケート			ローラースケート	1	
26	その他			その他		

	かくれんぼ	116	28	なわとび	40	26
	三輪車	112	26	三輪車	40	26
	水あそび	86	20	おにごっこ	37	24
	ジャンブルジム	54	13	ジャンブルジム	35	23
	タイヤあそび	54	13	のりものごっこ	20	11
	のりものごっこ	48	11	ちゃんばら	16	10
	かげふみ	46	11	始めの一步	15	10
	㊦かごめ	46	11	かんけり	15	10
	㊦花いちもんめ	38	9	かげふみ	14	10
	始めの一步	29	7	ゴムとび	13	18
	かんけり	28	7	㊦かごめ	7	5
	石けり	28	7	㊦花いちもんめ	8	5
	ちゃんばら	28	7	㊦通りゃんせ	7	5
	ゴムとび	24	6	石けり	5	3
	㊦通りゃんせ	19	4	タイヤあそび	2	1
	ローラースケート	2		ローラースケート		
	その他(鉄棒)	5	1	その他(鉄棒)	3	1

あるからか、遊びの種類も豊かであるし、幼稚園の一部をのぞいては園でもよく遊んでいた。遊びの少ない地区からの解答は種目も少なく、回収率も少なかった。そして子どもたちの遊びの中で「音楽リズム」に属する部分は実に稀薄であるし、特に男児に

いてはほとんど調査の上に出てこなかった。遊びにはリズムもあるし、身体活動もあるので、「音楽リズム」に関連したものが出なくてもいいではないかという考えも成り立つが、実際にはまだまだ「音楽リズム」を重視する保育形態の実状と、リズム感覚と人

間生活のかかわりを思う。保育の中ではいろいろの形で行なわれる「音楽リズム」が、表では楽器遊びと「わらべ歌」による歌遊びの形で取りあげられている。子どもが育つ過程で行なう遊びの中には子ども自身が友だちとかかわりの中で育てていくものと大人とかかわりの中で育つものがある。保育者や子どもを取りまく大人はそのいずれかを考え、前者に属する時は一歩後退して見守らねばならないし、後者に属する場合には子どもが興味をもち、行なう喜びの中で自らの活動に対し意欲をもてるような方法を工夫して成長するよう暖かく見守らねばならないと思う。「音楽リズム」は後者に属する面が多いのでなからうか。

この表に出ている「わらべ歌」は大正の時代から今まで子どもの遊びにふさわしいものとして保育の場に行けられたものである。「わらべ歌」についての研究は特に十年來大きく広がって来て、幼児とのかかわりについては今もなお保育誌等を通して取りあげられている。しかしそのすべてが現在の子どもたちに迎えられるものでもないし、音楽の広い場面でこれが最高のものであるというものではないことは、その発生がいろいろの地方の独特の場で、しかもそれぞれ異なった年代に異なった社会環境の中で育って伝えられたものであることもわかる。しかし、いつの時代でも関係のあるものが過去を振り返って残す価値のあるものは、残す努力をしなければならないし、われわれの祖先が何を考

え、どんな心情で子どもの養育にあたったかを知ることには実に大切だと思ふ。言葉は心を表現するための財産であり、詩は心を表現する方法であるとするならば、「わらべ歌」には日本民族の親の愛情のこまやかさと、どの時代にも「わらべ歌」を通して感じられる子どもの遊びに対する思いやり等、読みつつ、歌いつつ、踊りつつ、強い感動を覚えるのである。流行の波に流されることなく子どもの遊びの実体を見つめて、その適当なものはさらに次の時代まで伝え、新しく子どもたちの作成になる「遊び歌」は大人の手で必要ならば残すための操作が必要であることも考えられる。

表1にはわずかな種類が出ているが、その前年同地区の祖父母を対象に「わらべ歌」の調査を行なった。学生が中心になって行なったために採譜等まで至らなかったので大変残念である、また一部の幼稚園、保育園の父兄が対象であるので全体的な収集ではないが、学生が外部のみに目をむけ勝ちであることに對して何かの反省となり、身近な生活の中に「わらべ歌」のようなたぐいのものがまだいろいろ残っているの、それらは保育の場とつながって流れていることに気付くようになればよいとゼミの学生を励まして行なったことである。紙数の関係でわらべ歌の列挙のみにさせていただく。

わらべ歌の種類

(1) 動植物に関するもの

いもむしごろごろ、うさぎうさぎ、うちのうらのくろねこ、うめかさくらか、からすかんざぶろう、かりかり、こうもりごっこ、ことしのぼたん、こやまのうさぎ、くまさん、ほたるこい、コンコンさま

(2) 手あわせ歌

せつせつせ、おちやらかほい、お耳をからげて、お寺の花子さん、げんこつ山の、一本橋ちょこちよ、一かけ二かけ、うちのこんべとさん

(3) 絵かき歌

あひる、かえる、お姫さま、おじいさんのかお、たこ入道

(4) 縄とび歌

一羽のからす、大波小波、おつきおはいり、かりゅうどさん、くまさん、たわらのねずみ、波は、どんどん、郵便さん

(5) 天気気象

一番星見つけた、大寒小寒、お月さんいくつ、たこたこあがれ

(6) 手まり歌

いちぢくになじん、一番はじめは、一文目のいすけさん、

大黒さま、かぞえうた、正月かぞえうた、山寺のおしょ

さん

(7) 砂遊び

いちじくらんらん、字かくし、陣地とり、でこぼこくろちゃん、なかなかほい、乃木大将、棒たおし、むこう横

丁の

(8) お手玉

おじゃみおふう、おひとつおとして、ひいふうみいよう

(9) 歳時歌

せきのかた、どんどんやき、山の神さま、山の子は、山の譜、お正月

(10) 悪口歌

ひとのひかげに、ひろこひがつく

(11) 子守歌

なくないいこ、ねんねんよう

(12) 不明

一休さんが、うえみれば、まめた

しかしこうして調べてみて、これらのものが子どもに伝わっていないことに驚いた。私たちの年代のものは、「わらべ歌」はほとんど肉親から習ったし、友だち同志集まって遊んで、自分の知らない歌が出ると帰って親に聞いた。また親たちは大方知っていて

教えることもできたように記憶している。時には知らないものがある子どもから習いもした。しかし今回の調査で驚いたことに子どもと大人の知るものつながりが少ないものが多いのは全くの予想外だった。子どもたちは他の大人から学んで、地方色少ない共通のものを遊びつつ知るより耳で聞いて、歌として歌う場面が多いのでなかるか。NHKでも昭和三十七年、三十八年ごろから取り上げて放送されているし、幼児の時間には四十四年ごろからたびたび取り上げられて、昨年度等低年齢の子どもの興味をもつものがずいぶん取り上げられた。私も三十六年に「ほたる」を

輪唱させて民放に出演した記憶がある。なぜ「わらべ歌」を取りあげたかという点、全く現在のような状態とは異なっていて、この教材が保育教材の中にあつたし、幼児の歌唱については一つものをいろいろに扱って、たびたび歌わせることが音楽性を育てるための大切な条件であり、二重唱、輪唱のようなハーモニーの楽しさや美しさを感じさせることは、できれば幼児から経験させるように思っていた。当時外国から少年合唱団が二、三来日したり、玉川学園の幼児たちのコーラスの放送等もあつたので、それが誘因だったかもしれないが、音楽を好きにするのには歌が歌えるようにすることだと思ひ、その方法をいろいろ考えていたころだったので「わらべ歌」が輪唱教材として、特に幼児には同旋律が何度も発生し、三度の和音が現われる点で適当なものが多いの

で取りあげていた。近年テレビ放送で絵かき歌が取りあげられたからか、幼児の絵本等にも紹介があり現在なお「わらべ歌」は教材の中に相当取りあげられる要素が多い。それだから私たちの幼かったころとは全く別な状態で伝承の場面が展開しているわけであるが、保育の面では子どもと教師のかかわりの中で行なわれることを考えると、その養成の場にある者としての責任を感じるわけである。そしてその遊びの場を親子共通のものに広げたいと願うのである。

II 家庭での音楽リズムに関する活動

保育の場ではまだ重要な役割を果たしている「音楽リズム」が、家庭生活ではどんな活動となつて再現され、遊びのかてになつていくかを知るため実状のよくわかつた数園に依頼した。これらの園は熱心なリーダーをもち、子どもたちの活動に対する扱ひも比較的いいと思われるし、子どもたちもその活動を楽しみ、積極的に楽しんでゐる。ただ調査の一部にある親の意識の中に、大人の技術に対する批判的な意識があつて、子どもの活動に対してそんな見つけがまだあることが子どもたちの家庭での活動をはばむという感じがしたことは残念であつた。

表Ⅱ 年長組 (325名)

歌	① 1 2 3 (38)			② 1 9 7 (60)			③ 5 (2)		
踊 る	テ	①49(15)	②69(21)	③ 5 (2)	①21(6)	②112(34)	③64(20)	① 0 2 0	③ 5
	レ	49(100)	50(72)	0	12(57)	73(66)	0	① 0 2 0	③ 5
	ビ	18 (38)	12(17)	0	5(24)	35(31)	0		
		39 (80)	26(37)	0	13(62)	65(59)	0		
楽 器		① 43 (35)	②67(54)	③ 3 (2)	①16(8)	②131(67)	③27(14)		
		④ 15 (12)	⑤14(11)	⑥ 4 (3)	④ 4(2)	⑤ 8(4)	⑥16(8)	② 2 (40)	③ 3 (10)
環 境	テ レ ビ(カラー, 白黒)			(135)			(140)	(100)	
	ラ ジ オ			(80)			(73)	(60)	
	ス テ レ オ			(65)			(55)	(33)	
	テーブコーダー(カセット)			(52)			(60)	0	
	ハ ー モ ニ カ			(100)			(100)	(100)	
	オ ル ガ ン			(53)			(62)	(20)	
	ビ ア ノ			(12)			(20)	(20)	
	電 子 オ ル ガ ン			(10)			(5)	0	
	ギ タ ー			(3)			(10)	0	
その他 ((13)			(10)	0		

数 字 人 数 () %

調査事項

(1) 遊びの媒介をする環境調査

テレビ、ラジオ(ステレオ)、テーブレコーダー(カセットテープ)、ピアノ、オルガン、ハーモニカ、電子オルガン、ギター、バイオリン、マンドリン、木琴、その他

(2) 活動の状況

歌う ①よく歌う ②時々歌う ③歌わない

踊る ①よく踊る ②時々踊る ③踊らない

④テレビを見ながら ⑤レコードを聞きながら ⑥歌を歌いながら

楽器 ①よく遊ぶ ②時々遊ぶ ③遊ばない

④おけいこに行っているので時々ひく ⑤おけいこに行っていてよくひく ⑥おけいこに行っていない

(3) よく歌う歌 ①ラジオやテレビの歌 ②幼稚園で歌う歌

(3) 調査人員 ①年長組 三二五名 ②年中組 二六〇名 ③年少組 九四名

年中組 (260名)

歌		① 1 1 9 (46)			② 1 3 7 (53)			③ 4 (2)
踊 る	テ	①49(20)	②64(25)	③6(2)	①15(5)	②94(36)	③28(20)	0
	レ	28(57)	36(61)	0	8(50)	69(73)	0	0
	ビ	16(30)	16(30)	0	6(40)	27(29)	0	0
楽 器		①22(20)	②84(71)	③8(9)	①10(7)	②99(72)	③20(15)	②3(75)
		④11(9)	⑤3(3)	⑥5(4)	④14(10)	⑤5(3)	⑥1(2)	③1(25)
環 境	テ レ ビ(カラー、白黒)	(140)			(160)			(100)
	ラ ジ オ	(78)			(86)			(30)
	ス テ レ オ	(50)			(57)			0
	ハ ー モ ニ カ	(100)			(100)			(100)
	オ ル ガ ン	(37)			(54)			0
	ビ ア ノ	(17)			(24)			0
	電 子 オ ル ガ ン	(8)			(8)			0
	ギ タ ー	(3)			(8)			0
	その他(木琴、マンドリン)	(9)			(10)			0

数字人数()%

計六七七名

子どもたちの環境を重視して第一項目にあげたが表の作成の結果は下段になった。調査の内容と表の関係についていうと、よく歌う(第一グループ)、時々歌う(第二グループ)、歌わない(第三グループ)に分けてまとめ、そこから、踊る、楽器で遊ぶ、というふうにだんだん細かく分類した。歌唱の三グループに属する、よく踊る、時々踊るはどのグループに属するものも同じ部類の子どもたちである。よく歌うグループに属するものがよく踊ったり、よく楽器で遊ぶということが表の上に現われてやっばりという気持ちがあった。百分率は上段から順を追って価値の出し方が異なっている。学年人数は全体人数との関係であり、各グループのものは組人数に対する%であり、テレビ・レコード・うたを媒介として踊る場合は%はそのグループ人数に対する比である。紙数を少なくするために、できるだけ表を縮小したので、見る人に理解しにくいことをおわびする。環境の数は表を見やすくす

年少組 (94名)

歌	① 5 2 (57)			② 4 1 (41)			③ 1 (1)	
	①19(37)	②29(55)	③ 4(8)	① 3(7)	②29(71)	③ 9(20)	0	
踊 る	テ	15(80)	18(69)	0	① 2(66)	23(80)	0	0
	レ	11(60)	9(32)	0	② 2(66)	11(40)	0	0
	ビ	14(70)	15(50)	0	0	17(60)	0	0
楽 器		①14(27)	②29(55)	③ 6(11)	① 1(2)	②29(71)	③ 8(2)	③ 1
		④ 0	⑤ 0	⑥ 3(6)	④ 0	⑤ 0	⑥ 3(7)	
環 境	テ	レ	ビ(カラー, 白黒)	(130)		(120)		(100)
	ラ		ジ オ	(80)		(38)		(100)
	ス	テ	レ オ	(45)		(36)		0
	テー	プ	コーダー(カセット)	(8)		(18)		(100)
	ハ	ー	モ ニ カ	(65)		(65)		0
	ピ		ア ノ	(12)		(10)		100
	オ	ル	ガ ン	(36)		(40)		0
	電	子	オ ル ガ ン	(4)		(5)		0
	ギ		タ ー	(2)		(5)		0
	そ		の 他	(20)		(10)		0

数 字 人 数 () %

るために全部で現わした。表の結果からいうと、子どもたちが歌うことの多いものほど音楽に対する興味が強く、その結果が踊ることや、楽器遊びにまで広がっていくという結果が出たわけで、運動神経が鋭敏であればリズムミカルな動きができるということではないようである。この表は家庭の調査から出たものである。この表は家庭の調査から出たものであるとすると、一層歌唱の指導については考慮しなければならないし、保育科学生の声学については一層の研鑽をしなければならないと思う。子どもの歌唱能力が音楽、さらにはリズム活動が好きらしい原因になることは、^{注IV}今までも書いたが、逆にいうならば身体のリズムミカルなくしては音楽の楽しい営みはないということであろうか。歌うことが上手というところにも一般にはソリストのイメージが多く、上等の音質をもったものを考える癖があり過ぎるように思われる。まず歌うことの楽しさが解るためには正しく歌う力を育てていくことであろう。作者の心は正

よく歌う歌 ベスト10

	年 長		年 中		年 少	
テレビ (ラジオの歌)	ウルトラマン	88	左に同じ	70	左に同じ	40
	仮面ライダー	82	仮面ライダー	56	ピンポンパン	36
	ピンポンパン	50	ムーミン	40	仮面ライダー	32
	ひみつのあっこちゃん	34	ピンポンパン	38	ムーミン	20
	ムーミン	32	帰ってきたウルトラマン	20	ミラーマン	18
	ミラーマン	27	ウルトラ7	14	ひみつのあっこちゃん	14
	帰ってきたウルトラマン	21	ミラーマン	14	テレビのうた	10
	テレビのうた	19	C.M.S	10	おぼけのQ太郎	10
	アタックNo.1	14	おぼけのQ太郎	10	C.M.S	9
	おぼけのQ太郎	14	アタックNo.1	10	みなし子ハッチ	8
幼稚園の歌	うれしいひなまつり	61	左に同じ	35	左に同じ	30
	うぐいす	19	チューリップ	20	左に同じ	18
	園歌	19	たき火	16	うぐいす	16
	気のいいあひる	11	園歌	16	左に同じ	16
	さんび歌	10	雪の小坊主	13	たき火	13
	たき火	9	キラキラ星	11	春よこい	10
	きれいな朝	7	左に同じ	9	日の丸	9
	仏様	7	誕生日のうた	9	手をたたきましょう	8
	数字のうた	7	うぐいす	7	さんび歌	8
	雪のペンキや	7	おさるのブランコ	6	朝の歌	7

しく歌ってこそ理解できて、楽しさも美しさも理解できるのである。目に見えない楽器である声帯を通して出す声は全く辛抱強い指導と愛情による以外育つ方法がない。また先生が正しく歌えることが前提になる。楽器を離れて正しく歌う力を育てないかぎり歌唱は大変不便なものになる。ハーモニカや笛等のメロディー楽器が大分多くなって来たので楽器によらないで範唱できるまで育ってほしいと思っている。その時こそ本当に子どもたちが遊びの中で歌ったり踊ったりできる時である。表の結果によると歌い一つ踊る子どもの数はいずれもグループでも五〇%を越えている。そんな「音楽リズム」の実施ができる時こそ子どもたちにとって楽しいものになると思う。楽器ではアコーディオンやギター等の携帯楽器が使用できることが幼児の「音楽リズム」の指導には必要だと思う。二歳三歳のころあんなに喜んで歌ったり、踊ったりする子どものあの姿をそのままの姿でつなぐためには「音楽リズム」を戸外に持ち出すことでは

なかるうか。室内で行なう音楽リズムは戸外でできないものや、戸外に出た時の予備になるようなものであると考えるならば、長時間の室内での営みはよほど避けることができると思う。子どもの「よく歌う歌」は調べて見ると、これだけ多くの歌がテレビの歌と合わせて歌われていることがわかった。人数の総計はテレビのよりも下回るが、表は一部省略したので現わさなかったが曲数はそれよりもさらに上回っていた。私はこれだけの歌を家庭にもちこんでいる実状を知って、これらの園の先生方の努力の賜だと思つた。テレビやラジオの歌は、物語りや画像に結びついている場合が多いが、幼稚園での歌は先生と子どもの人間的つながりの中で培われて歌われるもので成り立ちの全く異なるものである。前者が次々その物語の変わると共に間もなく消えて行く場合が多いのに比べて、後者は何度方法を変えてもあまり変化なく現われて、つくづくと教育の力に驚くのである。紙面の都合で割愛した曲数は三十曲あまりである。表には現われなかったが、第一グループや第二グループに曲名のないものが相当数あつた。中には「よく歌うが曲名がわからない」と書いてあつたが、私が子どもを幼稚園に出している時子どももの歌う曲の印刷をいただいていた。家庭で母親と子どもが再度歌うことを願つてのことだと思つた。保育者のこまやかな心づかいと努力によって保育の歌のいくつかは受けつがれているのかもしれない。楽器の項の④⑤は現在

特別指導を受けている数であるが、母親の何人かは幼児期に音楽性を育てたいとの願いを記していた。せっかく始めた勉強が続くような指導と、母親の協力が願いたい。とかくの批判はあるが音楽は幼児から積み重ねたものが一番育つし、子どもにとつて決して迷惑な贈物でなく、できれば誰もが育て得られれば幸いである。学生の拳手による解答によれば「音楽が好き」という項は一割に満たないのに、「音楽ができる」とよい」という項については一〇〇%であつたことを見ても、幼児期の重要性は誰もが感じていた。幼児の音楽教育の指導者が少ないことよりも母親に現在ほとんどその力のないこともむしろかしい原因であると思う。それだけに幼児教育者にゆだねられた「音楽リズム」の勉強については研究を続けなければならぬと思うのである。正しい教育の中で育つ明るい人間性とリズムカルな身体が、生命のリズムにもつながることをもって努力したいと思うのである。

(市郷学園短期大学保育科)

注Ⅰ 保育学会昭和四三年発表『幼児の音楽教育と小学校教育

との関連』

注Ⅱ 音楽教育と人間形成 マーシャル著 美田節子訳

注Ⅲ 保育学会発表『四歳児未満児と音楽リズム』

注Ⅳ 保育学会昭和三八年発表『幼児の声域』市郷学園短大人

文学紀要一一号『幼児と音楽』